

# こどもの言語発達：ハナの場合

## Language Development: A Case Study of Hana

岡 秀夫  
Hideo OKA

### Abstract

This is a longitudinal study of Hana's language development up to the age of three. What is unique in her language acquisition is a Japanese/German bilingual development, although she can only be classified as a passive bilingual. The obtained data are divided into two parts according to her age: up to the age of two in the second chapter and up to age three in the third. What is emphasized in the data analysis is the role of the social context, the importance of cognitive development and the unique aspects of bilingualism. It is hoped that the discussion and findings will contribute to a better understanding of the mystery of a child's language acquisition.

*Keywords* : language development, language acquisition, bilingualism, passive bilingual, cognitive development

キーワード：言語発達、言語習得、バイリンガリズム、受容バイリンガル、認知の発達

### 1. はじめに

こどもは言語習得の天才と言われる。その神秘を説明するのに生得説と環境説という2つの対立軸があるが、両方が複雑にからみ合ってこどもの言語発達は進んでいくと考えられる。この小論では、実際に得られたデータをもとに、3歳までの言語発達を扱う。とりわけ、ことばの発達がこどもの認知と関わる側面に注目し(生得説)、日本語とドイツ語のバイリンガルの発達という特異な事例(環境説)にも焦点をあてたい。

この事例研究の対象になった幼児は、「ハナ」と呼ぶことにする(Hと表記)。2008年11月13日生まれの女兒で、家族構成は父親、母親の3人家族である。両親ともに日本人であるが、父親(F：当時30歳)は日本語の他に英語も話し、母親(M：当時30歳)はドイツ語、英語も話す。ハナのことばの発達、とくにバイリンガルの面において影響が大きかったのは母親の母、

つまりハナの祖母である（「オマ」(O)と呼ぶ）。オマはオーストリア人で、ドイツ語を母語とし、日本語も英語も流暢に話す。ハナとの接触においては、原則的にドイツ語で話しかけることにしたが、ハナから発せられる日本語も十分に理解し、必要に応じて日本語にコードスイッチした。ハナとの接触頻度は不定期ではあったが、週1日程度、時には数日連続という形をとった。母方の祖父は日本人で、ドイツ語も英語も解するが、ハナに対しては日本語を使った（「オパ」(P)と呼ぶ）。その他、資料の中に登場するのは、伯母（母親の姉：「タンテ」(T)）と父方の祖母（「バーバ」）である。また、オマのドイツ語ほどではないにせよ、ハナのことばの発達に影響を与えた要因として、モンテッソーリ・インターナショナルスクール幼稚園がある。2歳直前から週1回程度（時には隔週）、半日または全日通った。そこでの使用言語は英語であった。それゆえ、ハナのことばの発達において、まわりからのインプットとして与えられた刺激は日本語が主流ではあったが、ある程度のドイツ語とわずかな英語の要素も含まれる。

資料収集は主に母親の記録にもとづくが、それに加えて筆者の調査メモ、オマからの報告によるものである。ハナの言語発達に関する記録は、2008年10月から2011年11月にわたる。つまり、ことばらしきものが登場した0歳11ヶ月（[0;11]と表記し、以下これに準ずる）から3歳の誕生日まで、2年間あまりに及ぶ。この小論では、それをもとに第1章で「2歳まで」、第2章で「3歳まで」に分けて論じたい。というのは、この2つの年代は言語発達における変化が著しく、その特質が異なるため、同じ枠組みで議論するのが難しいからである。

## 2. 2歳まで

ハナの2歳までの言語発達について、まず、大きな枠組みとして（1）調音の発達、（2）語彙の発達、（4）文構造の複雑化、に分けて論じたい。それらの一般的な枠組みに加えて、この時期の注目すべき特質として（3）社会的文脈におけることばの獲得、および、この事例研究のユニークな側面として（5）バイリンガルの特異性、（6）認知・社会性の発達、という項目に分けて議論していく。

### 2. 1 調音の発達

ことばの発達の中で音声に関わる面で、イントネーションのような韻律的特性は生後すぐに獲得されるが、文節特性はその後になる。つまり、調音の発達において、まず母音の知覚能力は生後6ヶ月前後、子音は10ヶ月前後と言われる。林（1999）によるとオペラント条件づけ法（ヘッド・ターニング）で[r]と[l]の弁別について日本と米国の6ヶ月児と11ヶ月児で比較したところ、6ヶ月児では日米の差がなかったが、11ヶ月児では日本人乳児の正答率が米国人乳児よりも優位に低下した。このことから、日本語にさらされた乳児は、11ヶ月頃になると日本語音韻体系に対応した音韻知覚を示し、[r]と[l]の区別ができなくなると考えられる。つまり、母語にない音対立の弁別能力は喪失されるのである。その後、調音の構音点、構成様式が母語のシステムに体制化されるのは2歳頃とされる。このことは、生得説と環境説の

接点を表し、生得的な言語習得装置 (LAD) が母語のシステムにパラメータ設定されるのである。

ハナの調音の発達においては、上記のような [r] と [l] の弁別にまったく問題は見られなかった。日本語と並行してドイツ語にも触れる機会があり、ドイツ語のインプットから、日本語にない調音も自然に獲得されていったのである。

初期に興味深かったのは、短縮語と発音のゆがみである。いくつかの音節からなる単語が、発音上プロミネンスのある1音節に短縮されるという現象が見られた。

- ・「バ」(バナナ)、「ナ」(バナナ)、「カ」(みかん) [1;2]
- ・「パ」(パンダ)、「パ」(スリッパ) [1;3-4]

また、次のように、語の終わりの部分のみに短縮された形で出現した例も、やはり音声上のプロミネンスの影響による。

- ・「ったい」(もう1回) [1;2]
- ・「いー」(おいしい)、「プーン」(スプーン)、「ナナ」(バナナ)、「かん」(みかん)、「グート」(ヨーグルト) [1;3-4]
- ・「たい」(痛い)、「もい」(重い) [1;4]
- ・洗濯物をたたんで「(で)きた」[1;5]
- ・「かな」(さかな)、「かい」(もう1回) [1;6]

さらに、次のような発音のゆがみや音の逆転・変形から、これらは乳児にとって調音的に難しいことがわかる。そのため、[giu:] → [nju:]、[n] → [t] に置き換えられている。

- ・「にゅうにゅう」(牛乳) [1;3]
- ・「たっとう」(納豆) [1;5]
- ・「プース」(スープ)、「ボック」(コップ) [1;6]

このように、1歳6ヶ月頃に観察される幼児の音産出は、置換、単純化という特徴を持つ。音の置き換えは、[zu:] ('zoo') → [du:] という閉鎖音化やわたり音化 [redi] ('ready') → [wedi] に見られ、また音連続の単純化は、弱音節削除 (banana → nana)、子音連続単純化 (train → ten)、語末子音削除 (bike → bai) というような形で現れる (佐野他 2011: 41-42)。

そのような発達過程を経て、1歳9ヶ月時点になると調音の進化が観察された。

- ・これまで「かい/ちっかい」だったのが「もう一回!」と言えるようになった。また、これまで単語の後半しか言っていなかった単語(「プーン」、「グート」、「まご」など)が徐々に全部「スプーン」、「ヨーグルト」、「卵」と言えるようになってきた [1;9]。

2言語の発達との関連で、音声面でも次のような形で自然に日本語にない調音も獲得していったことは、上述したように11ヶ月で調音の知覚が母語の音韻体系に支配されることとの関連において、注目に値する。

- ・「バル」(ボール、ドイツ語で Ball [bal])、「ハーズィー」(うさぎ、ドイツ語で Hasi ['ha:zi]) : 日本語式の「ハーギー」でないことに注意 [1;3-4]

## 2. 2 語彙の発達

初期理解語には、「マンマ」のようなものをさす事物名詞に加え、「バイバイ」「(イナイイナイ) バー」のような、大人との相互交渉の中で大人が発する語が多く含まれる。また、産出面では、初語は生後10ヶ月から15ヶ月の間に出現し、普通名詞が多い。とくに、体の部分、動物、食べ物に関することばが多いのが特徴で、次に多いのがあいさつや会話語など社会的相互交渉の語である（岩立他 2005）。

まず登場したのが、次のような擬音語と事物名詞である。

- ・象のレゴを見て「パォ〜」（「ワンワン」に続いて擬音語第2弾） [1；1]
- ・事物の名前、とくに食べ物（音的に簡略化）：「バ／ナ」（バナナ）、「か」（みかん）、「アップー」（アップル） [1；2]
- ・（絵本を見ながら）「人参／桃／〜」（食べ物の名前を表す名詞多し） [1；8]

形容詞においても、次のようにその発達が観察された。

- ・「おいしい」 [1；4]
- ・「おいしそう」 [1；6]
- ・「大きい！」 [1；5]
- ・（ト）マト＝「赤い、小さい」 [1；7]
- ・「かわいい」「やさしい」（心情を表す形容詞が登場） [1；11]

動詞においては、屈折に関する進歩と同時に、ドイツ語の発達もめざましい。

- ・「行きたい」（>行きたい）：動詞の終止形にそのまま活用させずに「たい」をつけた。 [1；7]
- ・「たたむ／たたんだ」：完了したことを表すのに、正しく過去形に活用させることができた。 [1；11]
- ・母親に対して“Sitzen!”（すわって）と指示する。 [1；8]
- ・あわてて食べているとき、“Warten!”（待ちなさい）で待つことができるようになった。 [1；4]

語彙獲得の第2段階は1歳半位からで、この頃になると、こどもはものには名前があるということがわかり、ものをさしてしきりに「これ何？」などと言って事物の名前を尋ねる。これは「命名行動」と呼ばれる。このような行動を通して、「命名期」には語彙が爆発的に増加する。

- ・はじめて見たものが何かわからなくて、母親に「これなーんだ」と聞いてきた。 [1；10]
  - ・最近いろんな言葉を覚えたいのか、知らないものを見ては「これなーんだ？」と言って聞く。 [1；11]
  - ・オマと絵カルタで遊びながら、ドイツ語で40の名前を理解する。Katze, Auto, Zaehneputzen（猫、車、歯磨き）というようなドイツ語を聞いて、その絵カルタが正しく選べた。 [1；9]
- この時期の興味深い現象として、いわゆる「カテゴリー化」が観察された。つまり、「ワンワ

ン」をイヌのみならず、馬、猫、ライオンなど、あらゆる四つ足動物に使ったりする。この誤用パターンは、ある語を大人の語彙における適用範囲より広く使い、似ているものすべてを「カテゴリー」の名称として用いるのである。この現象は「過大般用」と呼ばれる。その後、成長するにつれて徐々にカテゴリーの属性が精密化されていく。しかし、このような誤用の事例から、こどもながらに言語体系を積極的に構築しようとしていることがうかがえる。これは外国語学習において「中間言語」(Interlanguage)と呼ばれ、大人の文法に至る途中の過程で見られる積極的な取り組みを表す。同じような例は、次のような場合にも観察された。

- ・鼻水や涙のことを、すべて「みず」と言う。[1;8]
- ・これと同じ現象は、「あつい」の意味領域にも見られた。大人にとって別に熱くなくても、ただやや温かい、ぬるいものもすべてに対して当てはめたと考えられる。一度「フー！」としてやると大丈夫だった。[1;8]

また、活動を表すことばにおいても、面白いカテゴリー化が観察された。

- ・以前父親がパソコンに向かっているときに「勉強してるんだ」というのを聞いて以来、電子辞書に向かって「べんきょう」と言う。[1;10]
- ・オバが口癖のように「(剣玉を)練習しよう／しないといけない」と言うため、(剣玉をもってきて「やって見せて」という意味で)「オバ、レンシュー！」という。[1;10] (「レンシュー」が剣玉をさす名前だと思った。)

## 2. 3 社会的文脈におけることばの獲得

幼児の言語獲得は、何らかの活動とともに生ずる。中でも、多くが親を中心とした社会的な相互交渉の中で起こる。ことばには文化がともない、その社会での習慣があり、行動とともに場面による決まり文句を身につけていく。そして、それが文化的アイデンティティにつながっていくのである。その意味において、ことばと文化は一体化したものであり、言語獲得は単に言語知識だけでなく、そのことばが使われている文化や風習を取り込んだ総合的な文化の学習であると言える(秦野 2001)。

とくに、語用論は、チョムスキー(N. Chomsky)の研究において捨象された言語使用の社会的文脈を重視し、文脈の中での意味、社会交渉における意味に注目する。そのような社会的状況の中で適切なことばを使用するために必要とされる能力が、「語用論的能力」(pragmatic competence)となる。そのためには、発音、語彙、文法の力に加えて、社会言語能力、談話能力、方略能力なども必要となる。これらはいわゆる「伝達能力」(communicative competence)として研究されている(Canale 1983)。しかし、そのような語用論的能力が発達するためには、こどもの認知の発達、社会性の発達を待たなければならない。

### 2. 3. 1 ジェスチャーの役割

乳幼児はことばを発するより以前に、認知的にものごとがわかってくる。それを示すのが、

ジェスチャーである。コミュニケーションにおいて、非言語的要素が果たす役割は大きく、顔の表情、身振りなどのキネシックスの占める割合は、メーラビアンの研究によれば55%とも言われる（ラフラー＝エンゲル・本名 1981）。

ことばの発達には「社会性」が深く関わっている。とくに、養育者（母親）との相互作用行為によって伝達能力が発達していく。伝達能力も、ことばを発する前の段階では、非言語コミュニケーションに依存せざるを得ない。具体的には、視線や指差しのような身ぶりによって意図を伝えるのである。

- ・玄関でバイバイができるようになった。DVDの“Clap your hands”の曲に合わせて手をたたき、「ちょうだい」と渡してくれる。[0；11]

このように、1歳頃に日常の決まりきった手順に関して、動作と一体になった表現、つまり「スクリプト」を獲得していく。

- ・指差しをするようになった。[1；0]
- ・「あっち」「こっち」と指差ししてどこに行きたいのか意思表示する。[1；5]
- ・動作とことばが一体となり、ものを渡すとき「はい」、おもちゃの携帯をもって「なにい？」（親の口癖の真似か、イントネーションまで）[1；4]
- ・手を振りながら「おーい！」、相づちをうって「ねー」、感嘆詞：ものを落として「あーあ」、こぼして「うわー」[1；5]
- ・「どうぞ」（>ちょうだい）：このような対人間のやり取りでの社会的役割はまだ未発達である。もらう場合にも、大人の「どうぞ」というインプットを繰り返す。[1；6]（この相互作用表現に関する問題は3. 1. 2. 2でさらにくわしく議論する。）
- ・かくれんぼ遊びの延長で、探すとき「～どこだ？」、三輪車に乗って「しゅっぱーつ！」[1；7]

### 2. 3. 2 決まり文句

上述の「スクリプト」(script)の獲得に見られるように、1歳頃に日常の決まりきった手順に関して、例えば「いただきます」という表現が、場面と動作とともに教え込まれる。とくに食事、着替えというような日常的な活動において、決まった言語的な指示をともなって一連の行動があり、それを「生活スクリプト」としてこどもは習得していく。それぞれの社会や文化において、円滑な社会生活を営むための「定型表現」がある。例えば、「バイバイ」や「ありがとう」、さらには「おじゃまします」などの決まり文句で、「ことばのしつけ」として教え込まれ、こどもの「社会化」を促す働きをする。幼児は社会的コンテクストの中で、特定の表現を特定の動作と結びつけ、それが何度も繰り返されることによって無意識的に身につけていく。このように、決まり文句や相互作用的な受け答えを通して、こどもの社会性が発達していくのである。

初期の産出語では、挨拶や会話しが多い。このことは、ことばが場面に依存した形で、人と

人とのコミュニケーションとして使われることを表している。その中で特徴的なのが、会話の発生である。会話の発生は1歳半頃に見られ、「お父さんは？」という問いかけに対して、「カイシャ」という型にはまった返答が登場することが多い。ハナの場合、それが「シナガワ」であったのは、父親の会社が品川にあったからに他ならない。

- ・くしゃみをするたびに“Bless you!”と言われていたからか、母がくしゃみをしたとき「ベッサー」。<sup>[1;7]</sup>
- ・くしゃみをしたので“Bless you!”と声をかけると、驚くことに“Thank you!”と答えが返ってきた。<sup>[1;9]</sup>
- ・「何歳？」の問いかけに、「いっさい！」。<sup>[1;9]</sup>
- ・深々とお辞儀をしながら「こんにちは～、こんばんは～」と言っていた。<sup>[1;10]</sup>
- ・ご飯を食べ終わったら「(ご馳走様)でした!」、英語のテレビ番組の影響で“Sorry”、旅行先の宿でプレゼントをもらい「ありがとう」。<sup>[1;11]</sup>

### 2. 3. 3 歌の役割

ことばの習得の上で、こどもにとって歌の果たす役割は大きい。こどもは潜在的に絶対音感があると言われるが、同様に、生まれながらにリズム感を持っており、自然に音楽に身体が反応する。歌は何度繰り返しても飽きず、歌に合わせて身体を動かし、楽しい活動であるばかりでなく、ことばの獲得にとっても効果的となる。外国語学習の場合も、歌は発音やリズムを練習するのに役立つことが知られている。とりわけ、日・英語のように、リズム感が音節中心と強勢中心というように根本的に異なる場合には有効となる。

- ・“Old Macdonald had a farm”の「イーアイアイオー」が歌えた。<sup>[1;5]</sup>
- ・カエルの歌が上手に歌えるようになった。歌に合わせて口ずさむ。例えば、「パンダ」、「パッくんもぐもぐ」、「Hello ~」（英）、「Old Macdonald」（英）、「Hoppa, hoppa, Reiter」（独）など。<sup>[1;6]</sup>
- ・英語の歌で“P-L-U-T-O”（ピーエルユーティオー）<sup>[1;8]</sup>
- ・歌が大好き：ぶんぶんぶん、あめあめふれふれ、ハッピーバースデー、むすんでひらいて、おもちゃのチャチャチャ、ABC Songなど。<sup>[1;9]</sup>

## 2. 4 文構造の複雑化

語彙サイズが大きくなるにともない、含まれる語のタイプの割合も変わる。最初のうちは閉じた語（助詞、助動詞）は少ないが、徐々に増加してくる。これは、閉じた語の獲得が統語の発達に大きく関係してくるからである。とくに、助詞は日本語の文構造と深く結びついており、その発達段階は次のように進む。つまり、1歳8ヶ月位までは限られた助詞が散発的に使われるだけであるが、1歳10ヶ月ごろになると助詞の頻度と種類の両方が急激に増加する。これは「助詞の爆発」と呼ばれる。中でも最も早く出現するのは終助詞「ね」、次に格助詞が登場する。

格助詞の中で最も早く出現するのは所有格「の」、行為者格「が」、道具格・場所格「で」、目標格「に」、仲間格「と」と続く。その後、係助詞・副助詞の「も」、接続助詞「て、と」へと発展する（岩立他 2005）。

他方、助動詞は助詞より1、2ヶ月遅れて活発化する。発達順序として大体において、現在・未来を表す「る」、完了・過去の「た」、否定の「ない」、持続・進行の「ている」、そして意思の「よう」、丁寧の「ます」という形で進む。

#### 2. 4. 1 2語文

この時期の文法の発達において、とくに注目に値するのが1歳6ヶ月頃に出現する2語文である。2語文は助詞が発達する前の段階ととらえることができ、2語のみではあるが構造化された発話で、文としての構成要素を含む。それゆえ、これは「軸文法」(pivot grammar)として分析される (Braine 1963)。つまり、幼児の2語発話期を観察すると、2つの語をただ適当に並べているのではなく、出現頻度が高く、その位置が固定された軸 (pivot) クラスの語と、もうひとつの開放 (open) クラスとを結びつけて発話していることがわかる。

・「appleおいしい」[1;4]

・「プーさん+大きい+ね」「ヨーグルト+ない?」[1;6]

このように、名詞のあとに「～だ」、形容詞のあとに「～ね」というような形で、文末に終助詞をつけるのは助詞の発達の中で最も早い。これによって相手の注意を引いたり、相手からの相づちを求めたり、対人間のコミュニケーションを円滑に進める方略として重要な意味を持つ。ただし、「ママいく」[1;9]の表現には2義性があり、「ママのところに行きたい」または「ママが取りにいくの」の二通りの意味合いにとることができる。どちらの意味合いで発せられたのかは、そのコンテキストに関する情報がなければ断定できない。これは、有名な“mummy sock”の例で、「ママの靴下」(行為者+行為物)なのか、「ママが靴下を」(行為者+対象)なのか2つの解釈が可能なのと同じである。

「～たい」がpivot (軸) となり、その前に名詞や動詞がおかれた表現が目立つのは、この時期の自己中心性を表す。ただし、動詞は終止形のままで用いられ、まだ正しい活用の概念はない。

・名詞「ママ／ぶどう／だっこ+たい」動詞「行く+たい」[1;7]

その後、「履きたい」が徐々に「履きたい」[1;8]へと進化していくことが認められた。

次の例はS+Vからなる2語文であるが、必要な文の要素をすべて含み、文構成の上で大きな進歩を示している。最後の例になると、3語からなるS+V+O構文が完成している。

・P:「オパがとる?」→H:「ハナとる!」[1;9]

・「きょう、プール行く」[1;9]

・「ハナ、ムービー見る」[1;10]

## 2. 4. 2 助詞

2語文の発達との関連で重要な働きをするのが、助詞である。次の例から、2語文と助詞の発達とは互いに深く関わっていることが明らかになる。というのは、2つの語の関係は助詞の働きによって明確になるからである。屈折言語でない日本語の場合、格を明示する冠詞や名詞の変化はなく、その役割は助詞が果たすのである。

- ・洗濯物を干すときに、いちいち「パパの」とか「靴下」とコメントし、所有の概念が生まれる。[1;6]
- ・「みんなのスイカ」[1;7]
- ・所有格の「の」が登場する。「ママのくつ、オマのバッグ、ハナのスプーン」[1;7]

その他の助詞も出現し、文が複雑化していく過程が、次のような事例からわかる。

- ・ママのズボンをみて「かわいいね」(形容詞+終助詞「ね」)[1;8]
- ・「にゅうにゅう(牛乳)とパン」(並列を表す接続助詞「と」)[1;8]
- ・いろんなことば(擬音語とか)の最後に「～って」をつける。例：「パタパタって」(引用を表す接続助詞)[1;9]
- ・「オマと話す」、「清里行く、オパとオマと」(並列/相手をあらわす格助詞「と」)[1;9]

## 2. 4. 3 助動詞

- ・洗濯物に関して「ハナ、たたむ」という発言の後、たたみ終えて「たたんだ!」「できた!」[1;10]

このような過去、完了を表す助動詞の用法から、過去の概念が育ちつつあることがうかがえる。また、「～します」や「～でした」のような丁寧語を表す助動詞を使うようになる。

- ・ぬいぐるみを赤ちゃんに見立てて「おむつ替えますよー」と言って、おむつを変える真似をしたり、プールの先生の口調で「それでは体操しまーす!グーパー、グーパー」と言ったりする。[1;11]

## 2. 5 バイリンガルの特異性

言語発達の初期に2つの言語は別々なのか、それとも一体なのかについてはまだ結論が出ていない。「統合言語仮説」では、2つの言語への分化を3つの段階に分けて説明する(Volterra & Taeshner 1978)。この説によれば、バイリンガル初期に見られる混用(mixing)は、第1段階で語彙体系は単一でありながら2つの言語からの語彙で構築されることに起因している。言い換えれば、しゃべっている子ども自身はどちらの言語を話しているのかまだ知らない状態にある。その後、3歳頃に2言語の語彙が分化し始めるとされる。

それに対して、「即時分化仮説」では、バイリンガル初期の言語体系ははじめから分化している、混用が起こるのは2つの言語体系が混同されているからではないとする。混用が起きるのは、たまたま子どもがある単語を言語Aで知らないのに、言語Bの知っている単語で置き換え

るという可能性、または、表層的に起こるミキシングはこどもが発話する際にコンテキスト(話し相手や会話のトピックなど)から起こる可能性が考えられる。バイリンガルのこどもはすでに2歳の段階で、相手によって言語を切り替えることが報告されている(Genesee 1989)。

ハナの発話にドイツ語が登場した初期の例は、次のようである。

- ・「バル」(ボール、ドイツ語でBall [bal])、「ハーズィー」(うさぎ、ドイツ語でHasi [ha:zi]) [1:3-4]

両語ともに、日本語の音韻システムに翻訳して「ボール、ハージー」とならず、ドイツ語の発音そのままに発話したことから、別言語という意識はなく、一つの貯蔵庫におさめられていると考えられる。

- ・あわてて食べているとき、“Warten!”で待つことができるようになった。[1:4]
- ・何をしたいのか尋ねられて、ドイツ語を解さないバーバに対してドイツ語で“spielen”(遊ぶ)と答えた。[1:7]

この最後の例から、語彙はまだ一つの貯蔵庫と一緒に蓄えられており、前日にオマとドイツ語で遊んだ影響で自然にドイツ語が出てきたものと推測される。2つのクマのぬいぐるみを、それぞれ別々に「Bear」(独)と「クマ」と呼んだ[1:7]のは、それぞれの呼称とっているのであろうか。

ハナの二言語の発達は均衡のとれたものではなく、明らかに日本語が優勢で、ドイツ語に関しては「受容バイリンガル」(passive bilingual)の特性が強かった。ドイツ語のインフォーマントはオマに限られ、インプットとしては週に1回程度(時には数日連続して)接するだけであつたので、当然と言えよう。その結果、かなりの程度聞いて理解はできるが、自分の方から産出することはあまりなく、返答はほとんど日本語であつた。理解していることの証左は、オマからの指示に対して、正しく反応する動作によって示され、観察可能である。次のような資料[1:8]から受容バイリンガルの特徴が実証される。

- ・O: Oma geht aufs Klo. Zeig mir das Klo! (オマはトイレに行きたいのだけど。トイレがどこか教えて) → H: トイレまで連れて行き、「トイレ」と言う。
- ・O: Bring ein Buch! (本を持っといで) → H: 本を取ってくる。
- ・O: Komm, Windel wechseln/ Haende waschen! (おいで、オムツ替えましょう/手を洗いましょう) → H: “Mama”(ママ)と言って拒否する。

ハナのドイツ語における受容バイリンガルの特性は、オマと絵カードで遊ぶ中で観察された[1:9]。それは、オマがドイツ語で言ったことばに対して正しいカードをとったことにより実証され、その数は40の事物の名前に及んだ。具体的には、この年代の幼児用の語彙 Katze, Auto, Zaehneputzen(猫、車、歯磨き)などに加えて、Kirche, Weihnachten, Nussknacker(教会、クリスマス、クルミ割り人形)などのような語彙を含んでいた。これらの語彙に見るように、こどもの自然な遊びの中にも文化が入り込んでいることに注目したい。

また、この時期になると少しずつドイツ語の発話も出現した。

- ・ O : Willst Du Zucchini oder Natto essen? (ズキニを食べたい、それとも納豆?)  
H : Hana Zucchini. (ハナはズキニ) [1; 9]
- ・ 公園でボールが遠くに転がってしまったのに対して、H : Oma iku! Hana sitzt und wartet.  
(オマが取りに行くの。ハナは座って待ってる) [1; 11]

この事例に見られる動詞の語尾変化は正確で、この年代では驚きである。また、語彙の混用に関しては、“Finger-itai” (指が痛い) というような表現からも、貯蔵庫は一つで、場面との関連でアクセスしやすい方が選択されると考えられる。もちろん、ドイツ文化に根ざした単語の場合とか、対応する日本語表現を知らないときには、ドイツ語がそのまま使われる。

「一親一言語」の環境で育つ幼児は、自然に人とことばを結びつけ、無意識的に相手によって言語を切り替える。いわゆる「コード・スイッチング」(code-switching) の現象である (岡 1995)。これに関連して興味深い出来事は、オマが電話で英語を話していたら「オバだ!」と認識したことである [1; 11]。もしこれが、ドイツ語だったらママと連想する。このことから、無意識のうちに人による言語の識別ができていることがわかる。まだこの時点では、別の言語体系として確立してはいないにせよ、音からくる全体的な印象によって言語の違いを知覚すると考えられよう。音声弁別能力に関して、母音が生後6ヶ月、子音が生後10ヶ月で母語の影響を受けるとされるが、抑揚のような音韻的特徴はそれよりも早く最初の数ヶ月の時期に獲得されるのである。

## 2. 6 認知・社会性の発達

この時期の認知の発達は、文法的には2語文や助詞による文の複雑化などに表れ、語彙的にもその数の増大だけでなく、過剰般用などのメカニズムの中に感知できる。他方、幼児にも自我の芽生えとともに自己中心的な反抗期が出現し、それと同時に、徐々に社会性の発達も促されるという興味深い2面性が認められる。つまり、個性化と社会化という相対立するような要素が互いに相まって発達していくのである。

- ・ 欲求や願望を表す「たい」の多用：「あみたい」(セサミみたい)「ブドウたい」(ブドウ食べたい)「行きたい」「見りたい」[1; 6]
- ・ 要求：「ちょうだい」、「あけて」[1; 6]

さらに、反抗期と思われるものとして、着替えたくない、飲みたくない、歯磨き嫌だ、というような意思表示と抵抗は「(い) やだ!」、ドイツ語でも強烈な“Nein!”によって示された。[1; 6]

一方でO : Willst du Kaese? (チーズほしい?) → H : Ja! (うん) と肯定するのに対して、それに対して、お昼寝など自分が嫌いなことに関しては明確に否定した。ここに、こどもながらに意思の芽生えが感じられる。

- ・ O : Willst du schlafen?/Bist du muede? (お昼寝したい? / 疲れた?) → H : Nein! (全然) [1; 7]

- ・母親に対して“Sitzen!”（座って）と指示したり、自分がやりたい時は「自分！」と言って自己主張するようになった。[1; 8]

この時期には、母親に指示をして、「天気予報見てて（自分はオバを迎えに行く）」「パン作ってて（自分はオマのところに行く）」「新聞読んでて」などが多く観察された。しかし、自分の目的を達成するのに自己主張だけでなく、より友好的な意思伝達の手段として、「もっと欲しいなー」と語尾に「なー」をつけるような表現も身につけてきた [1; 11]。このようなコミュニケーション方略は、すでに終助詞「ね」[1; 6] で登場しているが、それと同じように日常会話の成立に重要な役割を果たす。

自己主張との関連で、親が何とか説得しようとして、「まず～してから」というような形で理を論そうとするが、まだ順番の概念は発達していない。また、この頃「あした」や「あとで」「～したら…」などを頻繁に使うようになるが、時間の概念が本当にわかっているのかは疑わしい。（時間の概念に関しては3. 1. 2. 1でさらに議論する。）

- ・O : Zuerst baden, dann Milch. (最初にお風呂にないって、それからミルク) [1; 7]
- ・「あしたプール」[1; 8]
- ・「ムービーみたい！」を連発するので、母親が「今見たいの？」と聞くと「いまムービー」と言った。[1; 9]

語用面での発達を表すのが、1歳11ヶ月時点で記録された次の母と娘の会話2例である。ハナの中に、母親とのやり取りを通して社会性が芽生えつつあることがわかる。最初の事例ではちゃんと会話が成立し、談話能力の進歩がうかがえる。また、後の会話例では、対人間のやり取りからこどもの人間的な成長が観察される。このやり取りに母親は大喜びし、痛いのも忘れてしまったそうである。

- ・(モンテッソーリ幼稚園へ迎えに行って)
  - M : 「今日何したの？」
  - H : 「ミスヤエコ（先生の名前）と遊んだ」
  - M : 「何して遊んだの？」
  - H : 「コーンとお花…」
- ・(娘の手が母親の目にあたって、母親が倒れ込んでいるところに近寄って来て)
  - H : 「どうしたの～？」
  - M : 「目が痛い。いたいのとんでけ、やってくれる？」
  - H : 「いたいのいたいのとんでけー！」

### 3. 2歳から3歳まで

前章ではハナの2歳までの言語発達に焦点をあて、調音、語彙、文構造など6つの側面から分析を試みた。それに続き、この章では、その後2歳から3歳までの言語発達を扱う。ところがデータを分析しようとする、2歳までと同じ枠組みが採用できないことが明らかになる。

なぜならば、この時期の言語発達のどの側面をとってみても、その背後に認知の働きが潜んでいることを無視できないからである。つまり、認知の発達と密接に相まって言語の発達があるからである。また、ハナの場合、バイリンガルの発達が極めてユニークな要素を含み、言語習得に関してモノリンガルでは見られないような有益な示唆を提供してくれる。そこで、この第3章では、大きく（1）認知の発達との関連で、（2）バイリンガリズムとの関連で、という2つの軸を中心に、それ以外の特記すべき事項は（3）その他、という形で議論を進めていくことにする。このような、新しい視点からのアプローチをとることによって、こどもの言語習得の秘密に関して新しい手がかりを得ることが期待できよう。

### 3. 1 認知の発達との関連で

2歳から3歳の時期は、接続詞によって文同士を結んで長い話を作れるようになり、文法的には2語文をへて「文法爆発」と呼ばれる時期を迎え、構造的に複雑化してくる。それらは、とりもなおさず、その背景に認知の発達があるからに他ならない。認知の発達でとくに顕著なのが、推論、問題解決、因果推論というような分野である。また、この時期の特徴として自己主張が強くなり、次の例に見るように意思伝達の欲求が盛んになる。

- ・新しく覚えたドイツ語の歌“Tri-tra-tralala”を口ずさんでいた。母親がそれを一緒に歌おうとすると「ママ歌わないで！」と制止された。[2;0]
- ・自分の意志がはっきりしてきた。おむつ選びもそうだし、服選びもそうだし、ディズニーランドでは母親が選んだ風船は「ちがいまーす」と言っ、自分の気に入った風船を選んだ。[2;0]
- ・「チーズにする（バターではなく）」と、自主的な選択をはっきりとことばで伝える。[2;2]

こどもの認知発達は、大きく5つの段階でとらえることができるとされる。つまり、第1段階の「弁別」はものの名前や用途を知ることである。これはすでに第2章で見た。この時期は第2段階として、「対応」つまりAとBが同じだということを認知する段階に達する。次の資料中、「～みたい」[2;0]が頻出するのがそれに対応する。第3段階が「分類」、AとBの違いがわかることで、例えば過大般用された「ワンワン」とライオンとは違うことを認識することをさす。その後、「組み合わせ」、「統合」と進んでいく（秦野 2001）。

- ・ポーパンを見て、「長いパンだね。ヒコーキみたい。」というような形で「～みたい」という表現が多い。例えば、映画「トイストーリー」を見て、「オーストリーみたい」。[2;0]
- また「対応」でも、このような対比・比較と同時に、どこかへ行ったときの写真を見て、「～行ったね」というような形で、記憶にもとづいて過去の出来事との連想や関連づけも盛んになる。
- ・「動物園、行ったね。」[2;2]

### 3. 1. 1 3つの段階

ここでは、得られたデータをもとに、ハナの認知の発達を次のような3つの側面からアプローチしたい。つまり、ことばに表れた認知の手がかりとして、(1) 質問の面から、(2) 文構造の面から、(3) 談話の面から、という3つの段階に分けて考察する。

#### 3. 1. 1. 1 質問の面から

2歳を過ぎた時点から質問がふえてくる。こどもの質問が急激に増える時期として、まず第1質問期は、1歳後半に「なに？」の命名期がある。そして、3歳頃になると「なぜ？」の第2質問期が訪れるが、これはこどもの認知の発達と連動している。それゆえ、まだレディネスができていないうちに、理由を述べたり、説明を求めたりしても効果がない。これは、文法の習得段階に関しても同じことが言える。

・「これな～んだ？」という質問が多い。[2;2]

同じ命名行動でも、ある一定の音調で発していることから、1歳半頃の「これ何？」というストレートな質問期を卒業して、シリアスな質問というよりも一種のゲームであることがわかる。

・質問が多様になってくる：「オパ何している（の）？／オパどこ行くの？／オパ何した？／オパ、パンおいしい？」[2;3]

これらは、こどもの知的関心の広がりを表し、成長の証左となる。そして、ついに第2質問期の到来を迎え、何ごとに対しても「なぜ？」を繰り返すようになる。次の例から、その執拗さの一方、本当に理由を問いただしているわけでもないことがわかる。[2;9]

・O：(プラムについて) Muss man waschen. (洗わないといけないね) →H：「どうしてー？」

・P：(朝食時に)「オパ、ここに座るよ」→H：「どうしてー？」

・O：(バルコニーから) Ich moechte hinein gehen. (部屋へ入りたいのだけど)

H：どうしてー？

O：Darf ich nicht? (だめなの？)

H：Darf nicht. (だめ)

これらの例に表れているように、自然な幼児バイリンガルの場合、どちらの言語であろうとも共通の認知システムに支えられていることがわかる。そこには、カミンズ (J. Cummins) の提唱する「共有基底言語能力」(CUP) が働いていると考えられる (ベーカー・岡 1996: 163-164)。

#### 3. 1. 1. 2 文構造の面から

次の段階として、文構造が複雑化してくる中に認知の発達がうかがえる。例えば、2歳2ヶ月の時点で、「ママ何飲んでるの？」というような複雑な疑問文や、「ハナが作ったソーセージ」

というような関係詞節を生成するようになった。また、「～好きね。～だけどね。」というような形で、複文的な構造を駆使して、逆説の論理をつけることもできるようになった。それに対して、「あつくておいしい」[2;3]のように、形容詞を2つつなげて、「AだからB」という因果関係を表すのは順接の論理である。

・P:「おいしい」→H:「ちょっと甘いけどね」(逆説的条件を補足する)[2;3]

この因果関係や逆説の論理というような認知の発達と、それに対応した文構造の習得とが相まって、ことばを使って考えるという思考力が育ってくると考えられる。バイリンガリズムでいう「学習言語能力」(CALP)に相当する。

### 3. 1. 1. 3 談話の面から

3つ目の段階が談話レベルである。この段階になると、上のような認知の発達をさらに発展させた形で、会話のやり取りの中で論理が展開される。論理の発達は、ものごとに正当な理由をつけたり、因果推論を行うという形で表出される。

・要求したもの(イチゴ/ストロー)がないことを告げると「また～買いに行こうね」と言う。[2;2] (「なければ店へ買いに行けばよい」という社会的なスクリプトが育っている。)

・M:(ピクニックで)「ストロー忘れちゃった。」→H:「ストロー買いに行こうか。」[2;2]

さらに、驚かされるのは、何かをしたくないときにもっともらしい理由をつけるという知恵が育ってきたことである。例:「狭いから」、「長すぎるから」[2;7]

・料理を手伝いながら、やりたくないとき、「おなかに赤ちゃんが入っているので、ポンポンできないの。」[2;9]

そのようなずるい知恵に対して、次の例は賢い知恵の発達を示唆する。

・洗濯機のコイン挿入口が高いことに対して、「シュトツカル(「踏み台」>ドイツ語 Stockerl)もっていったら、とどくでしょう。」[2;9]

・滑り台の段がぬれているのをみて、「ぬれてるよ。雨が降ったと思うよ。」[2;9]

・(足湯で)M:「ママ、びしょぬれだよ。」→H:「ぬれたらタオルで拭けばいいよ。」[2;9]

・M:「(リンゴ)もう大きいしかないよ。」→H:「切ればいいじゃん。」[2;11]

この年代で、このようなもっともらしい理由を考え出したり、正しい因果推論を行うのは驚きである。「AだからB」、「AなのはBだから」、「AならBすればよい」というような形で展開される論理は帰納的推論と呼ばれ、こどもの認知的発達の表れに他ならない。例えば、くしゃみをする時風邪を引いているからと考えるのは、風邪を引くとくしゃみがでるという知識を用いて推論が働くからである。その延長線上に、つじつまを合わせるというさらに進んだ行為がある。次の談話は、はじめから考えていたわけではないが、自分が誤って描いた線について尋ねられて、後づけ的に、もっともらしい説明を考え出し、自分の描いた絵を正当化している。

即座にこのような弁明的口実を考えだして急場をしのぐというのは、コミュニケーション方略として大きな進歩を表す。[2;10]

H: (ボードに顔を描いていて: 目のつもりで2つの黒マル、次に間違えて横線、次に鼻のつもりで黒マル、その下に口のつもりで横線)

O: (上の横線について尋ねて) “Was ist denn das?” (これは何?)

H: 「ひげじいさん」

### 3. 1. 2 認知的な誤り

これまで見てきたように、2歳の段階ではいろいろな認知的な発達が観察される一方、まだ認知的に未熟で、その結果、ハナの言語使用において誤りが多い領域も認められた。とくに顕著だったのは、時間の概念と役割関係に関してである。

#### 3. 1. 2. 1 時間の概念

まず、時間の概念に関しては、次のような事例が記録されている。

- ・ここ数日「あと30分」がブーム [2;0]。出かけるまで「あと30分」、お昼寝まで「あと30分」など。

別に厳密な意味での時間を言っているわけではなく、今すぐにやりたくないの、「もう少ししてから」という意味合いで使っている。

- ・「あと30分」に続いておもしろい時間の概念: 「すいようびに」 [2;1]。しかし、曜日の概念はまだない。
- ・時計の概念がわかり始めたのか、「針が〇〇にきたら××する」(「赤ボチに来たら／上に来たら」) [2;9] とは言うものの、やりたくない口実に他ならない。
- ・「きのう／あした」の時間の概念にも混乱が見られる。例: ずいぶん前のことを思い出して「あしたやったねー。」「あした (>きのう) 行ったよね。」 [2;9]
- ・「タンテちゃん、もう (>まだ) 来ないね。」 [2;10]

このような事例から、まだ時間の概念は十分に理解できていないことが明らかになる。また、次のような場面から、まだ右と左という概念も育っていないことが認められる。

- ・靴が左右逆なので、「これは右／左だよ」と何度言ってもつかめない。 [2;9]

#### 3. 1. 2. 2 相互作用表現

誤りが頻出したもうひとつの領域は、対人的な役割関係を表す相互作用表現においてである。

- ・「ごちそうさま」のときに間違って「いただきます」。 [2;3]
- ・「ただいま」と「お帰り」が逆。 [2;9]

これらの誤りには興味深い共通性がある。つまり、対人間のやり取りにおいては、役割に応じ

て定型化したパターンがあるが（例えば、帰宅した者が「ただいま」と言い、それに対して家で迎える側が「お帰り」と言う）、ハナの発話を見ると、インプットとして相手側の大人の表現を聞き、それをそのまま真似て反復するため、相手方の表現になってしまうのである。2歳10ヶ月になっても依然として、買い物ごっこをする中でお客の役をやりながら「いらっしゃいませ」を発したり、見送りにいくときに「お迎えにいく」と言ったりすることにも表れている。

この年代では、時間の概念や役割関係というような認知の発達はまだ十分に達成されていないことが明らかになった。それ以外にも、2歳児にとってまだ認知的に難しい領域は、次のような事例の中に見られる。

- ・「してほしい」ことも「～したい！」と混同している模様。[2;5]
- ・「あげる—もらう」の混乱の例：「ハナがくれたの」[2;6]。この混乱は、[2;11]になっても観察された。
- ・「\*バーバにくれた」[2;9]

このような誤りから、2歳児にとって授受関係の概念はまだ認知的に難しいことがわかる。授受関係を表す助詞の使い方そのものが複雑で、「バーバが私にくれる／バーバに（から）私<sup>が</sup>もらう」というような助詞の使い分けは、外国人学習者にも特別な困難を与える。

### 3. 2 バイリンガリズムとの関連で

バイリンガリズムが発達するパターンにはさまざまなケースがあるが、ハナの場合、同時バイリンガルではあるが、ドイツ語との接触が限られていたため、受容バイリンガルでしかなかった。つまり、ドイツ語で話しかけられても、日本語で答えるという形が主であった。しかし、後のデータにも表れているように、集中的に接する機会に恵まれるとドイツ語が産出面にも登場してくる。明らかに日本語が支配的ではあるが、特定の分野では、ドイツ語が用いられたりもする。ドイツ語が優勢な例として、次のような語彙がある。

- ・すべての色は日本語だが、blau（青）だけはドイツ語（慣れ親しんだドイツ語の歌でたくさん登場するから）。[2;2]
- ・リボンを作りながら「マッシュタルをつける」（この単語はドイツ語Mascherl（蝶ネクタイ）でしか知らないの）。[2;2]

次の会話例は、話者の意図を理解するのに何が必要なかを示唆していて興味深い。

- ・（タンテ宅で、ミッキーマウスの人形を見て）

H：「カーテンやってるね」

T & P：…？（何のことかわからない。curtainのことか？でも一体それがどうした？）

M：Karten（独：カード遊び）のことだよ。[2;4]

さすがに母親はこの状況を取りまく背景的知識が備わっているので、この不明瞭な発話からハナの意図することばの意味が推論できたのである。この例が示すように、コミュニケーションにはその背景的知識が不可欠で、発話の適切な解釈はコンテキストに依存する。

・動物名はほとんど日本語だが、Papagei (オウム) だけは知らないでドイツ語。[2;7] このような事例から、両方の言語ともに一つの貯蔵庫におさめられ、まだ分化していないことがわかる。と同時に、語彙の混用は混乱ではなく、知っているかいないかの問題であることもわかる。とくにハナの場合、2言語のバランスが不均衡であるばかりでなく、分野による違いもある。明らかに、オマと交わる分野ではドイツ語が支配的になる。その意味において、どのようなバイリンガルもまったく均衡ではありえず、分野により、場面により2言語のバランスは異なるのである。

### 3. 2. 1 二言語の切り替え

上で述べたことを言い換えれば、同時バイリンガルの言語発達はモノリンガルと変わりはない。ただし、バイリンガルは、モノリンガルのこどもにはない言語の選択というオプションを持つ。状況や相手によって言語の使い分けが行われるのがコード・スイッチングであるが、ハナの場合、まだ一つの貯蔵庫なので、語彙的にも、文法的にも分化していないため混用も多い。日本語を基語とし、ベースとしての日本語の文構造の中に何の抵抗もなくドイツ語の語彙が混用される。このような切り替えが起こるのは、ドイツ語の表現が優勢である場合で、たいてい話し相手はオマである。しかしながら、この現象は混乱ではなく、習得の状況やコミュニケーションのコンテキストが影響していると考えらるべきであろう。両方の言語は単一の貯蔵庫に蓄えられ、必要に応じて適宜引き出されており、バイリンガルのこどもにとっては別の言語という意識はない。

- ・「Alleine. 自分でできるの」(一人で) [2;2]
- ・O: Hast du alles gegessen? (全部食べたの?) → H: 「Alles 食べた。」(全部食べた) [2;3]

まだ言語的には未分化であるにせよ、人によって違うことばを話す、という意識が芽生えつつあることが、次のような事例 [2;3] からわかる。人と連合されたことばの使い分けに注目したい。

- ・風呂場で鏡が曇って自分の顔が見えないので、父親に対して、「Wo bist du?—オマがいう。」(どこにいるの?)
- ・食事の時、M: 「いただきます」 → H: 「Let's eat—ミスヤエコがいう。」その日モンテッソーリで1日英語づけになったから。

### 3. 2. 2 ドイツ語の誤り

#### 3. 2. 2. 1 文法

とくにユニークな点が、ドイツ語の獲得過程における誤りである。誤用はその発達過程を映し出す。典型的には、broken-broke-broken というような3段階をへて大人の文法が習得されることがよく知られている。とくにbrokeという中間言語は、誤りというよりも言語システ

△構築へのこどもの積極的な取り組みを表し、ルールを過剰般化した結果であると見なされる。

・「大きくなったら gross bist になったら～（ハナもコーヒーを飲む）」[2;2]

これはオマの“Wenn du gross bist.”（大きくなったらね）という二人称表現をそのまま借用し、繰り返した誤りである。文法的に一人称にして Wenn ich gross bin とすべきであるが、まだそのような人称やそれに対応して動詞を活用させるというような認識はない。これと同じタイプの誤りが、次の2例にも見られる。

・O: Kannst du schon? (できるの?)

H: Kannst du nicht. ((\*あなたは) できない) [2;6]

・(レゴで遊んでいるとき)

O: Das brauchst du nicht? (上昇調で) (これいらなの?)

H: Brauchst du nicht. ((\*あなたは) いらなの) [2;7]

これらの誤りも、インプットを真似てそのまま繰り返したため、二人称 du を誤用している。このような誤りは次のように説明される。つまり、子供に向けられた発話に登場する二人称代名詞は常に子供をさすので、一人称と間違えて「逆転ルール」を獲得するからである。

### 3. 2. 2. 2 語彙

バイリンガルの誤りの中で、もうひとつユニークで興味深い点は、2つの言語における語の対応である。「等位型 (coordinate) バイリンガル」のように2つの言語の意味体系が完全に独立していれば起こらないであろうが、ハナの場合、複合型 (compound) で、しかも日本語が優勢な「偏重 (dominant) バイリンガル」である。その結果、語彙の意味領域に関して次のようなユニークな誤りが生ずる。

・(パズルをやっている)

O: Das ist schwer. (これは難しい) →H: 重い。[2;4]

ハナのメンタル・レキシコンには、ドイツ語の schwer という語に対応する日本語として「重い」しかない。もし日本語で別個に「難しい」という語を知っていても、schwer とうまく結びつかない。

・O: Ich muss Medizin nehmen. (薬を飲まないといけないわ)

H: 何を持つ? [2;5]

上の schwer と同じ誤りのパターンで、これは nehmen の意味領域として最も基本的な「(何か) 持つ/取る」しかないことを表している。英語でも take medicine がそうであるように、Medizin nehmen (薬を飲む) はひとつの連語である。

・(桃が変色しているのを見て)

O: Nicht mehr schoen. (もうきれいじゃないね)

H: (母親に) もうかわいくないから、食べていいって。[2;9]

これはshoenの意味の取り方の問題で、「きれい」という基本的な意味よりも、自分になじみのある「かわいい」を優先させた誤りである。

・ O : Reis muss stehen.

H : なんで立たなきゃいけないの? [2:11]

このコンテキストでは、stehenは「(ご飯を蒸すために)そのまま置いておく」という意味であるが、「立つ」という基本的な意味でとらえている。このような意味領域に関しては、母語においても経験を通して徐々に広がっていくのを待たざるをえない。

### 3. 2. 3 受容バイリンガルから産出へ

#### 3. 2. 3. 1 受容バイリンガル

ハナのバイリンガルは明らかに、受容バイリンガルの特徴を表していた。オマがドイツ語で話しかけても日本語で答えるというパターンが一般的であった。ところが接触が増すにつれ、徐々にドイツ語を産出するようにもなってきた。次のような時系列的な記録から、その変化がうかがえる。とくに数日連続して一緒に過ごした場合には飛躍的な進歩が見られ、いわゆるイマージョン方式で豊富なインプットを受け、次第にアウトプットにつながっていったと考えられる。この意味においては、クラッシュェン (S. Krashen) がインプット理論において唱えた「スピーキングはそのうちに自然に発生する」という論もあたると言えよう。ただし、筆者は外国語教育・学習の観点からは、そのような論はあまりにもナイーブなネイティブ的発想であると批判した (岡 2002: 111)。

・ O : Was willst du zum Fruehstueck? (朝ご飯何がいい?)

H : パン。

O : Was noch? (それから?)

H : ブルーベリー。

O : Was noch? (それから?)

H : ヨーグルト。

O : Was willst du trinken? (何飲みたい?)

H : あたたかいミルク。[2:2]

この一連のやり取りは、典型的に受容バイリンガルの特徴を表している。その後、ハナの理解力がさらに進歩したことは、次のような事例から明らかになる。

・ オマとお医者さんごっこをする中で、ドイツ語で Ich brauche einen Polster. (枕がいるよ) / Wir muessen Fieber messen. (熱を測らないといけない) / Du musst mir eine Spritze geben. (注射をしなないといけない) のような難しい用語や表現を理解して、適切な反応を示す。[2:7]

・ (電話で)

O : Ich habe drei Buecher fuer dich gekauft. Ich habe "Bremen-ongakutai," und noch eins,

das ist "Dornroeschen war ein schoenes Kind." (本を3冊買ったよ。「ブレーメンの音楽隊」ともう1つは「眠り姫」。)

H: うん、もうひとつは? [2;7]

談話の筋が正確にわかっている、3冊目の本のことを尋ねているのはまさに的をえている。

・(オパとオマの家に泊まりに来て)

O: Willst du heute mit Papa schlafen? (今夜パパと寝る?)

H: パパいないよ、ここに。

O: Willst du heute mit Mama schlafen? (今夜ママと寝る?)

H: いないよ、ここにいないよ。

O: Willst du heute mit Opa schlafen? (今夜オパと寝る?)

H: オマと。[2;7]

ドイツ語の質問をきちんと理解し、それに対して機械的な返答ではなく、状況的に適切な応答をしていることがこの談話のコンテキストから裏づけられる。

### 3. 2. 3. 2 産出へ

そして、次のような例から、ハナのバイリンガル能力が徐々に産出にもつながっていくことが観察される。

・(いちごを食べるのに)

O: Mit Joghurt essen oder so essen? (ヨーグルトで食べる、それともそのまま?)

H: So essen. (そのまま食べる) [2;3]

・(電話で、トイレでうんちしたことを自慢して)

O: Hast du es alleine gemacht oder hat die Mama geholfen? (一人でしたの、それともママが手伝ってくれた?)

H: Mama holfen. (ママが手伝ったの) [2;5]

これは、geholfenと過去分詞形を正しく使った点にも注目したい。ドイツ語で完了形を形成するhatと発音上プロミネンスのないge(holfen)が省略されるのは、ネイティブのこどもでも自然に起こる現象である。

2歳の終わり頃になると、促されたり、選択肢を出されたりしたのではなく、自発的な産出が登場するようになる。

・H: 水ください。

O: Wasser? (水?)

H: Wasser. (水)

O: Warmes oder kaltes? (温かいの、冷たいの?)

H: Kalt. (冷たいの) [2;9]

・(オマと動物園セットで遊んでいるとき)

H : レストランをつくろう。

O : Fuer die Loewen? (ライオンのため?)

H : Kinder. (こども) [2; 10]

さらに、次に示すようなドイツ語のアウトプットの中身を分析してみると、多義性を使い分けたり、自然な心情の表出があったり、主体的な情報提供が見られたりというような形で、さまざまな成長の跡が認められる。

・ O : Bist du schon angezogen? (もう着替えたの?)

H : Noch nicht. (まだ) [2; 10]

・ O : Die Joghurt ist weg. (ヨーグルトはなくなった)

H : Brot ist weg. Opa ist weg. Mama ist da. (パンもなくなった。オパもいなくなった。ママはいる。) [2; 11]

この例では、wegの持つ多義性、「(全部食べて) ない」と「(今ここに) いない」とをうまく使いこなしている。

次のようなハナが自然な形で苦言を呈するデータは、彼女のドイツ語が無意識のレベルにまで定着し、自然な感情とともに発せられていることを表す。つまり、言語習得が認知レベルにとどまらず、心情レベルまで浸透し、「自然な獲得」になっているのである。臨界期を過ぎてからの第二言語学習では、このレベルまではなかなか期待できない。

・ (プラスチックのナイフで切れないものだから) Geht nicht! (切れない!) [2; 11]

・ (生後1ヶ月の弟が、さっきおむつを変えたばかりなのにまたうんちしたのを見て) Schon wieder! (またー!) [2; 11]

次の談話を見ると、ちゃんとした会話が成立しているだけでなく、とくにここでは、ハナの方が主体的な情報提供者となっている点、大きな成長の証と言えよう。

・ O : Wir brauchen einen Haargummi. (髪の毛のバンドがあるよ)

H : (風呂場のキャビネットを指さして) Gummi ist da d(r) innen! (髪の毛のバンドはあそこの中)

O : Wo ist das Playmobil? (プレーモービルはどこ?)

H : (箱を指さして) Playmobil ist da. (プレーモービルはあそこ) [2; 11]

### 3. 2. 4 翻訳能力

コード・スイッチングと同様、バイリンガルのユニークな言語能力の特徴のひとつとして、翻訳能力がある。2歳半を過ぎたことから、オマの話すドイツ語を母親に通訳するようになった。実際のところ、母親は十分にドイツがわかるのではあるが、ハナの認識の中では「母親=日本語」という住み分けがなされているのであろう。

・ (電話で)

O : Aber in Kiyosato sind viele schoene Schmetterlinge. (清里にはきれいな蝶がたくさん

いるよ)

H：(母親に通訳して) 清里にはきれいな蝶がたくさんいるんだって。[2；7]

「たくさんきれいな～」という直訳ではなく、形容詞の語順の適切さ、表現の自然さに注目したい。共有された基底言語能力をもとに、それぞれの言語は独立しており、干渉を起こさない。

次の会話では、オマと母親の間に入り、相手によって2つの言語を切り替えながら、効果的に言語の間を立ち回るバイリンガルの姿が映し出されている。

・O：(母親に対して) Ich glaube, ich schmeisse das blaue Latzi weg. (青いエプロンは捨てないといけないね)

H：(オマの発言を聞いて母親に) なんで青いラッチー、ポイするの？

M：オマに聞いて。

H：(オマに) なんで青いラッチー、ポイするの？

O：Es ist nicht mehr schoen und man kann es nicht mehr zumachen. (もうきれいじゃないし、閉まらなくなったから)

H：(母親に通訳して) しまなく (>しめられなく) なっちゃったんだって。[2；9]

2歳11ヶ月になると、ドイツ語が違うことばであるという概念が出てきたようで、動物の本を見ながら、母親に「これドイツ語でなんて言う？」と尋ねる。例：Affe, Giraffe (猿、キリン) 自分は知っていながら、母親にそのようなテストを課し、その結果、「ママ、ドイツ語上手ねー」というコメントに結びついたのは、ユーモラスと言わざるを得ない。

こどもは言語習得の初期に、It's a ~というような形で表現を固まり(chunk)として習得し、そのためIt's a my book. というような間違いをすることが知られている。次の父親とのやり取りから、表現を固まりとして習得しているだけでなく、個々の単語レベルでも正確に理解していることがわかる。

・(ドイツ語の歌の本Was Kinder gerne singen (こどもは歌が好き)を見ながら)

F：Kinderは何？ →H：こども。

F：singenは？ →H：歌うたう。

F：gerneは？ →H：すき。[2；10]

### 3. 2. 5 コミュニケーション方略

翻訳能力との関連で、次のような2言語間のコミュニケーション方略は、認知の発達を裏づける事例として注目に値する。

・(歩き回っていたハナが、脈絡なしに急に「ガイガレン」と言った。それを聞いたオマは何のことかわからなかったので、確認した。ハナは何回かゆっくり繰り返すのだが、依然として不明である。そこで、次のようなやり取りがなされた。)

O：Ich weiss nicht. Zeig es mir! (わからないわ。見せてごらん。)

H : (まわりを見回して) あの青いやつ。

O : …? Was blaues? (青いのって?)

H : オマが作った青いやつ。

O : Ah, du meinst die Jacke. (あー、カーディガンのこと) [2;7]

バイリンガルは一つの言語での能力不足からフラストレーションを起こしやすいとされるが、ハナがこの年代で、自分が言わんとしていることを伝えるのに、1つの単語に執着したり、短気を起こしたり、諦めたりしないのは驚きである。論理的に段階をへて自分の意図する対象物を描写し、ことばで説明することによって見事に意思伝達に成功している。このような方略は、異文化コミュニケーションにおいて「意味の交渉」として相互理解を達成する上で重要となる。

・(朝起きて、今日やりたいことを尋ねられて)

H : 清里でエレベータの椅子に乗ろうか。

M : 「エレベータの椅子」とは何?

H : オマと高尾山で乗ったやつ。[2;8]

Sessellift (リフト) に対応する日本語の単語を知らないため、自分の意図する指示物を表すのにドイツ語から直訳した例である。この謎解きをする、「リフト」のことをドイツ語で Sessellift と言い、この語は Sessel (椅子) + Lift (エレベータ) からなる。この2つの構成要素を合わせると「エレベータの椅子」という合成語が生まれる。これと同じタイプの事例として、日・独語のバイリンガル発達の中で、「目玉焼き」を表すのに Spiegeleier (Spiegel 鏡 + Eier 卵) を直訳して「卵の鏡」[2;2] と表現したという記録がある (Oka 1980: 8)。

交通信号の色に関して、大人が「緑」を「青」と言うのは、純真なこどもの目には不可解に映る。その理由は、青に二通りの青があり、上位語としての「青<sup>1</sup>」と、その下位範疇として「青<sup>2</sup>」と「緑」が存在し、交通信号に関しては、緑をも含む「青<sup>1</sup>」が用いられているからである。それゆえ、交通信号の「青」は英語で green に対応し、このような問題は言語の相対性として「サピア・ウォーフの仮説」につながってくる。言語と文化の接点として、その辺りの認識がすでに3歳前のハナに無意識のうちにあることが、次の例からわかる。

M : (信号) 青だよ。

H : 緑だよ。

M : ドイツ語では緑と言うよね。

H : Gruen! (緑) [2;11]

### 3. 3 その他

これまでハナの2歳から3歳までの言語発達に関して、認知とバイリンガリズムという2つの大きな枠組みで考察してきた。ここでは、膨大なデータの中からそれらの枠組みでとらえることのできなかったものを精査し、子供の言語習得を考える上で見逃すことのできない事例について、次の6項目にまとめることにする。

### 3. 3. 1 言い間違え

- ・「おまたせしました」がどうしても「おたませしました」になってしまう。また、バンビのパチンコのおもちゃが気に入ったようだが、どうしても「バンビ」が「ピンバ」になる。

[2;1]

- ・最近の言い間違いの例：食べる→「ばべる」、味見→「あじみに」、手袋→「てでくろ」いずれもゆっくり「た・べ・る」のように言ってやると正しく言えるのに、またすぐ戻ってしまう。[2;2]

このような発音面での言い間違えは認知というよりも、音声にかかわる運動器官の発達の問題である。そのような言い間違えがある一方、ハナで興味深いのはドイツ語の発音に関して、下の例 [2;11] に見るように、[r] の発音および [gr] という子音の連続に関してまったく問題がなかった点である。つまり、調音において2つの言語に同化した発達を見せていることがわかる。このような点が、上述の心情レベルにまで至る自然なことばの獲得と同様、早期に外国語に触れることの最大の利点となろう。

- ・“Tri-tra-tralala”：[r] を抜かして言うが、[l] にはならないことに注目。
- ・“Grabowski”：これだけ複雑な音の連続であるのに正しく発音する。とくに [r] を [l] で代用しない点と、[gr] の子音連続に注目。

### 3. 3. 2 文法的誤り

形容動詞や動詞の屈折変化に関して、以前の研究でも観察された「きれいくない」[2;3] (Oka 1980:8) と同種の誤りが見られた。発達上のレディネスの問題が、日本語文法システムの複雑性とからまって、誤りにつながっていると考えられる。

- ・～みたくくないね／～好きくない。[2;4]
- ・M：フレークいる？ →H：いりたい。[2;6]
- ・遠いくないねー。[2;11]

ドイツ語で人称の概念がまだ育っていない例を du / gross bist で見たが (3. 2. 2. 1 参照)、それと同じタイプの間違いが日本語でも観察された。次の「あんた」はくだけた二人称代名詞であるのに、ハナは自分をさすものととらえているようである。それまでは「ハナちゃん食べる？」というような形で名前を使った表現が使われていたため、二人称の「あんた」もそれと同じ枠組みでとらえたものと思われる。このように、両方の言語で共通の認知的な壁が存在することは、上述の「共通基底言語能力」を実証する有益な資料となる。

- ・P：あんた食べる／取る？ →H：(自分のことをさして) あんた食べない／取る。[2;10]

### 3. 3. 3 空想

- ・最近本や冊子などを読み上げる振りをして意味不明のことばを発している。[1;10]
- ・最近たまに爆発したかのようにひたすら一人で (意味不明なことを含め) しゃべり続ける。

[1; 11]

この2例は、すでに1歳10-11ヶ月時点で観察されたことであるが、こどもは大人以上に想像力が豊かで、こどもによっては空想が大好きで、夢物語にふける傾向が強い。それは想像力の発達を示し、こどもの成長の一側面をなす。しかし、それが認知的な発達と関連するものなのか、性格的な要因によるものなのか、断定することはできない。

- ・車の中で独り言：「～こわい。～やさしい。」[2; 0] いろいろと想像してことばで遊んでいる。
- ・一人で本をひらいてブツブツと物語らしきことをつぶやく。絵を見てそれにあったお話を作っているようだ。[2; 1]
- ・「ダッフィーはねー、～」現実と空想の世界の区別がない。「ダッフィー」という名前のディズニーの熊の人形が大好きで、このように空想が弾み、ダッフィーはいろいろな年齢になったり、いろいろなことができたり、神出鬼没で千変万化する。[2; 11]

### 3. 3. 4 ユーモア

空想と同様にこどもの成長を表すのが、ことばによるユーモアの表出である。とくに、ことばを使った遊びはバイリンガルの強みで、替え歌を楽しんだり、別の意味合いにとったり、言語間のしゃれで遊んだりすることが報告されている。

- ・今はできないことを伝えると、「大きくなったら」と言う。今日はりんごジュースを「大きくなったら」飲むことになったのだが、しばらくすると「大きくなったよー！」とお腹をさわりながら母親のところへ来た。(あれ、何か勘違いしてる！) [2; 0]
- ・「しゃぼん玉」の歌を歌って：「しゃぼん玉とんだ～、ヤマネがとんだ～」だって(笑) [2; 2]
- ・父親が「梅雨だね」と言ったら「…スープ？」と不思議そうな顔。数日前に「(豆の入った) つゆ＝スープみたい」と教えたことから。[2; 7]
- ・(ハナにわからないよう隠れるようにして)

F：カスー

M：ーテラ

H：カステラ食べたい。…お皿だね。[2; 10]

この最後の例は、隠れてカステラを食べようとしていたのがばれてしまっただけでなく、典型的にバイリンガルのユーモアになっている。というのは、「Teller [独] = 皿」であるから。

### 3. 3. 5 社会性

- ・何かほしいときに、語尾に終助詞「なあ」ってつける。例：「みかん、ぱべたいなあ」[2; 0]

これによってコミュニケーションを円滑にし、自分のほしい物を手に入れとする意図がうかが

える。終助詞「ね」はすでに [1;6] で登場し、「なあ」も [1;11] 時点で初出が記録されているが、これらはすべて日常会話の成立に重要な役割を果たす。対人間コミュニケーションにおける社会性の成長を示すからである。これと同じ働きをするものとして、「何してるの〜？」 [2;1] と相手へ親しみを込めて問いかけることにより、コミュニケーションを円滑に運ぼうとする方略も見られた。

すでに1歳児の段階で「スクリプト」が登場するが、次のような「ゴッコ遊び」を通していろいろな生活スクリプトを練習していく。それによって、無意識のうちにその社会の決まりごとを身につけていくのである。

・(ままごとをして)

H：コーヒーいる？

M：うん、牛乳入れてね。

H：牛乳は買ってない／こぼさないようにねー。[2;5]

### 3. 3. 6 文字

ハナの文字への関心が、すでに2歳の早い段階で、次のようなアルファベットの習得に結びついた。このことはリテラシーの発達につながり、小学校の外国語活動における文字の導入を考える上でもヒントになろう。

・A、Cにつづき、OmaのOを覚えた。[2;0]

・駐車場のPを見て、「パパのPだ！」とアルファベットを認識する。[2;2]

## 4. おわりに

この小論は、こどもの幼児期の言語発達に関する縦断的 (longitudinal) な事例研究である。ハナの3歳までの膨大な記録をもとに、データの整理、分析を試みた。その資料的な価値もさることながら、ユニークなアプローチでハナの言語発達の神秘に迫った。とくに強調したいのは、認知との関連におけることばの発達と、バイリンガルとして2言語の獲得という側面である。これらの点において有意義な議論ができ、新しい視点を提供でき、今後の研究への示唆を与えることができたとすれば幸いである。

\*この小論は、平成20-22年度科学研究費補助金・基盤研究 (C) 「バイリンガルの言語切り替えと第二言語産出のメカニズムに関する研究」(代表者：岡秀夫) [課題番号：20520488] の一環として行った研究にもとづく。生の資料は、岡科研報告書『バイリンガリズムと第二言語習得・教育』(平成23年4月)に掲載されている。資料収集に関しては鈴木恵美理氏に大変お世話になったので、この場を借りて謝意を表したい。

**【参考文献】**

- ペーカー、C. (著)、岡秀夫 (訳・編) (1996) 『バイリンガル教育と第二言語習得』 東京：大修館書店
- Braine, D.S.(1963). On Learning the Grammatical Order of Words. *Psychological Review*, 70 (4), 323-348.
- Canale, M. (1983). From Communicative Competence to Communicative Language Pedagogy. In Richards, J. C. and R. W. Schmidt(eds.), *Language and Communication* (pp.2-27). London: Longman.
- Genesee, G.(1989). Early Bilingual Development: One Language or Two? *Journal of Child Language*, 16, 161-179.
- 秦野悦子 (編) (2001) 『ことばの発達入門』 東京：大修館書店
- 林安紀子 (1999) 「声の知覚の発達」 桐谷滋 (編) 『ことばの獲得』 (pp.37-70) 東京：ミネルヴァ書房
- 岩立志津夫、小椋たみ子 (編) (2005) 『よくわかる言語発達』 東京：ミネルヴァ書房
- Oka, H. (1980). Language Development of a Japanese and German Speaking Child-With Special Emphasis on Complex Sentences. 『言語科学』 15、九州大学教養部言語研究会、1-29.
- 岡秀夫 (1995) 「コード・スイッチングをめぐる諸問題」 広島大学英語教育研究室 (編) 『松村幹男先生退官記念英語教育学研究』 (pp.122-133) 広島：溪水社
- 岡秀夫 (2002) 「バイリンガリズムと言語教育」 上田博人 (編) 『日本語学と言語教育』 (pp.95-120) 東京：東京大学出版会
- ラフラー＝エンゲル (編著)、本名信行 (編訳) (1981) 『ノンバーバル・コミュニケーション』 東京：大修館書店
- 佐野富士子、岡秀夫、遊佐典昭、金子朝子 (編) (2011) 『第二言語習得：SLA研究と外国語教育』 大学英語教育学会 (監) 英語教育学大系第5巻、東京：大修館書店
- Volterra, V. & Taeshner, R. (1978). The Acquisition and Develoment of Language by Bilingual Children. *Journal of Child Language*, 5, 311-326.

(平成24年11月9日受理)